

会 議 録

会議の名称及び会議の回	第2回飯田市中学生期の文化芸術・スポーツ活動連携協議会 文化部会
開催日時	令和5年7月31日(月) 午後7時00分～8時45分
開催場所	飯田市役所3階 C311-C313 会議室
出席委員氏名	別紙名簿
欠席委員氏名	今村光利氏、桑原利彦氏
傍聴者	なし
出席事務局職員氏名	生涯学習・スポーツ課 伊藤課長、本島補佐、樋口主事、賜部活動地域移行支援コーディネーター
会議の概要	以下のとおり

○協議・確認事項されたこと

①めざす姿(理念・モデル)とそれに向けた進め方について

- ・R7年度末までに、休日部活動はなくなる。
- ・将来的には平日部活動も地域へ移行を進めていく。

②生徒の主体性を引き出す活動イメージの共有

- ・地域との関わりが生徒の主体性を引き出す。
- ・生徒の参加が地域活動の活性化にも繋がる。
- ・文化系部活動の場合、「所属感」を求めている生徒が多く、「ゆるさ」が主体性を引き出すポイントになる。

1 開会 (進行:生涯学習・スポーツ課 伊藤課長)

2 挨拶 (塩澤部会長)

3 報告事項 (事務局 樋口主事)

(1) 第1回飯田市中学生期の文化芸術・スポーツ活動連携協議会の会議録について ～事務局より説明～ →補足・意見等なし

(2) これまでの進捗状況について (賜部活動地域移行支援コーディネーター)

- ・学校、保護者、地域指導者の意識醸成について
中学校部活動運営委員会(5/2 鼎中、5/11 緑ヶ丘中、5/18 高陵中、8/1 旭ヶ丘中)
PTA講演会等への説明(4/8 飯伊PTA連合会、6/11 下久堅小学校)
- ・先進地視察
7/11 千曲市への視察報告 →補足・意見等なし

4 協議

(1) 事例紹介

①事例発表

竜峡中学校美術部の活動紹介「地域との連携」美術部顧問:百瀬先生、南信美術会:手塚先生
～事例発表～

【百瀬先生より】

ア 竜峡中美術部について

(ア) 部員数・様子

- ・全校145名のうち、美術部は22名が所属。生徒の中には、社会体育や塾などに通う生徒も多く、普段の活動には15名程度が参加。

(イ) 活動方針

「社会に生きる美術の場や作品をつくり出す」

⇒日頃から「ここに私たちの作品を飾りたい」という目線を持って過ごすこと「この作品はここに飾りたい」という目線を持って制作活動に取り組むよう指導しており、技能の向上につながっている。地域で学び、学んだことを地域に広げることも大切にしている。

(ウ) 活動内容

○令和3年度

絵を額縁に入れて飾る「校内展示」、共同制作活動(美術部旗)、飯田市美術博物館 作品見学、天竜峡写生大会(夏休み)、川路地区文化祭作品展示(川路公民館)、ヘブンスそのはらコラボ「森の中の美術展」

○令和4年度

「校内展示」「共同制作活動(5メートル作品)」、飯田市美術博物館(春草、ワークショップ、現代の創造展)、川路地区文化祭作品展示(川路公民館)、三穂地区文化祭作品展示(三穂公民館)

【ワークショップ活動】

「オリジナル紙コースター作り」をヘブンスそのはら、三穂公民館で実施。

○令和5年度

「校内展示」「共同制作活動(美術部旗)」、飯田市美術博物館見学(春草作品、手塚先生ワークショップ)、豊田市美術館見学(「吹けば風」展、澤田華さんワークショップ)

【ワークショップ活動】

「桜の草木染め体験(補助)佐倉さま桜まつり(北方地区)

「オリジナル紙リース作り」桜街道桜まつり(龍江地区)

「校区の小学生交流会」ワークショップ(かわらんべ)9/19

「結アート展(障がい者アート展)」ムトスぷらざ展示 9月

(エ) 活動を通じて感じていること

「地域で行う活動により循環が起こる」

例1:地域の方に認めてもらうことが、生徒の自己肯定感の向上に繋がる

例2:地域からワークショップ等のオファーがもらえる

例3:謝礼をいただき、豊田市美術館へ行くバス代の一部になった

⇒次の活動につながる(学ぶ機会が増える、新たな目的が生まれる)

(オ) 生徒が大切にしていること(生徒の様子から)

- ・「自分の描きたいこと、やりたいことを実現する時間」の確保。
- ・仲間とともに、話をしながら、安心感や所属感をもって活動すること。
- ・「美術」が好き。もっと技能を高めたいという生徒もいるが、いつでも教えられたい訳ではなく、必要な時に教えてほしい。

(カ) 顧問として大切にしていること

「社会に生きる美術の場や作品をつくり出す経験をさせたい」

- ・展示・公開することを前提とした作品づくりを意識させる

- ・展示の場の確保（→顧問が交渉した場もあった）（校内、地域公民館、ヘブンスそのはら、ムトスぷらざ）
- ・講義的ではない、「ゆるさ」のある雰囲気づくり
- ・地域に出る活動を増やす（ワークショップ、美術館ツアー）
→飯田市美術博物館との継続的な連携、公民館主事との連携・繋がりを
- ・「やりたいこと」ができる環境づくり（様々な分野の作品制作）
- ・メディアによる活動の発信（信毎2回、南信州2回、中日1回）

イ 美術部の活動を地域移行していく場合に意識したいこと

- ・大枠の「目的」「目標」の設定を行う。
（例：社会に生きる美術の場や作品をつくり出す経験をさせたい）
- ・生徒が「やりたいこと」を実現できる環境づくり。（個別、学年、全員のグループ分けを丁寧にしていく必要あり）
- ・ある程度の「ゆるさ」（安心感）、「一体感」（⇒所属感）を作り出す。
- ・目的に合わせ、活動を徐々に生徒と決め出す。（ある程度は指導者からの提案もあり得る。）
※人数が課題

【手塚先生より】

ア 美術系部活動地域連携の現状と課題

- ・美術系部活が地域と連携することは難しく、現在中学生を巻き込んだ活動はない。竜峡中学校の美術部の活動は特別進んでいる。
- ・南信美術会では、次世代育成事業として南信美術展にジュニア部門（高校生）を設けて各校の美術部に出品を呼びかけ、作品の発表会を大人と一緒にやっている。高校生が加わることによって美術展に活気が出てくる。
- ・美術の活動が学校（授業・部活動）の中に収められていて外に出ることがあまりない。
- ・美術・芸術活動をしている年配の方も「物足りなさ」を感じており、自分たちが楽しかったことを若い世代にも伝えたいとも思っている。

イ 体験機会の創出に向けて具体的な方策として考えられること

- (ア) 美博での美術部の活動の受入れ
 - ・学校の部活動単位での受け入れを行っているが、顧問の先生の考え方に左右されてしまい、顧問が代わると途絶えてしまう事がある。
- (イ) 飯田市美術博物館主催「中学生造形教室」
 - ・令和5年度は8名（定員15名）が参加している。年6、7回の活動。
- (ウ) 飯田創造館機能の旧地場産移転の課題と関連させて
 - ・飯田創造館の移転が話題となっているが、

～質疑応答～

- (委員)
 - ・昨年、部活動の活動時間が減少しているなか、これだけの活動をどのように実施されているのか。工夫されている点等あれば教えてください。
 - ・「ゆるさ」というのは大事なキーワードになると思うが、「たるんでいるのではないか」という軋轢を受けることはないか。もし、あるとすればどのように対処されているか教えていただきたい。（百瀬先生）
 - ・土日の活動は月に1回あるかないか。2時間の部活の中で何をやりたいかを整理したり、イベント等で忙しくなりそうな時だけ土日の部活動をやっていた。ワークショップの手法については、美博（専門機関）に相談し、鑑賞だけでなく、活動のための学びの時間として活用させて頂いたので、

スムーズに活動に繋がられた。

- ・「ゆるさ」については、これまでの活動がゆるかったので、今の活動内容について、むしろ周囲から褒められることが多い。（委員）
- ・「ゆるさ」がポイントになると思う。大人も欲張って用意しないよう、子ども達の希望を聞きながらゆるく準備・手配することがポイントになると感じた。あまり立派なことを並べるのではなく、子どもの側に立って活動していることが百瀬先生の素晴らしいところだと感じた。（委員）
- ・個々がやりたいこと、先生がやらせたいことの折り合いをどうやって取っているのかお聞きしたい。（百瀬先生）
- ・ワークショップについては、佐久市の岩村田高校や松川村立松川中学校の活動を参考に、地域と繋がる活動をやりたいと思い、それを生徒に伝えた。最初は騙し騙しで生徒に声をかけて始めたが、実際にワークショップを開いてみると上手くいかなかった（声をかけても「時間がないと言って断られる」、説明が上手くできない）。しかし、上手くいかなくて悔しかった経験が生徒の変化に繋がりを、2回目、3回目に繋がった。
- ・個人の活動については、平日の活動については何をしても良いことになっている。生徒達が「今日は勉強をする日」「発表に向けて制作をする日」というのを自然と切り分けが出来ている。（委員）
- ・授業もやりながら、これだけ部活動をやっている先生自身大変ではないか。また、上級生が下級生を教えながらの活動や、先生がたまに指導に入り、地域と結ぶような活動は可能なのか。（百瀬先生）
- ・美術部の場合、美術部の指導の傍ら、授業の準備もできるため、負担感はあまりない。地域での活動についても、何回かやるうちに地域の方にも分かって頂けており、打ち合わせが不要になるなど負担感は少なくできています。テニス部の先生等は外でつきっきりで指導しているので大変そう。
- ・基本的には「学校班」として平日の活動をし、合同練習として月1で活動をするという千曲市の実践事例については、美術部については問題は少ないと思われる。
- ・むしろ顧問が転勤になった時に活動をどう繋いでいくかを考えていかないといけないと感じる。
- ・先輩が後輩に教えていくという部分については、運動部は多いかもしれないが、美術部の場合はあまり見られない。（委員）
- ・先日、本を読んでいて「部活動は有効な教育活動ではあるが、教育課程ではない」ということを知って衝撃を受けた。そうであるとするならば、やはりもっと授業に力を入れて、嫌にならないような授業をしっかりと先生がそこでやっていただくのが第一ではないか。そこでも足りなければ、地域に出てより幅広い活動に参加していくという風にした方が良いのではないかと感じた。（賜部活動地域移行支援コーディネーター）
- ・おっしゃる通り、学校の教える内容は、学習指導要領にある程度規定されている。その中で、部活動は、「学校教育の一環である」という文言があるために、学校の中で行ってきたが、教育課程の中に組み込まれている訳ではなく先生がボランティアとして部活動を支えてきた。ただ、学校教育の一環として、部活動の担っていた役割はかなり大きいものがあったと思われる。先ほどの百瀬先生の話の中でも、所属感や安心感という話があったが、部活動は、教室の授業だけでは感じられない仲間と一緒に取り組む良さや、継続してやり抜くこと等、色々なことを担っていた。こうした部分も大事にしなければならぬが、課題の部分も明るみに出始めたてであり、このままでは立ち行かなくなってきている。学校の先生たちも「授業にもっと集中するべき」というお話もあったが、まさ

にその通りで、授業が第一だが、それ以外にも生徒指導の対応や不登校の生徒への対応等、様々なことが押し寄せてきており、なかなかそこに向かえないということもある。生徒と向き合う時間があまり確保できないというようなこともあり、こうしたことも含めて部活動のあり方を検討していかなければいけない時期に来ているということは間違いない。「部活動だけ変えれば働き方改革になるのか」、「部活動だけ変えれば先生たちが授業に集中できるのか」というとそうではないが、1つのきっかけ（窓口）として真剣に考えていく必要のある問題だと認識している。

(委員)

・現場の先生方はどういう風に捉えられているか。

(賜部活動地域移行支援コーディネーター)

・粹に感じてやっていた先生もいたのではないかと思う。全ての先生ではないが。生徒と同じ気持ちを共有できる場であったのは間違いないと思う。ただ、家庭が犠牲になっていたり、地域活動に参加できなかったりということも起きていたのかもしれない。問題は山積みであると捉えている。

(塩澤座長)

・現役の先生方はどうでしょうか。

(委員)

・吹奏楽部が持てるようになってからは楽しかったが、他の部活動の顧問は負担に感じていた。
・教えたい先生もおそらく大勢いると思う。こうした先生方を地域と連携しながら有効活用していいと良い。全員一律にというのではなく、苦手な先生もいるだろうし、子育てに忙しい時期や年代もあると思うので、柔軟に考えていけると良い。

(委員)

・部活を通して生徒を育てたり、粹に感じていたりする先生もいる。ただ、家庭が大変だという先生もおり、一律にできないというのはその通りだと思う。

(賜部活動地域移行支援コーディネーター)

・「楽しかった」という先生もいるが、6割以上の先生たちが自分の専門でない(経験したことの無い)部活動を教えているというデータあり、苦しさを覚えている先生も多いのではないかと思う。

(委員)

・(千曲市の事例の)先生方の登録制はすごく良いと思った。先生も残業が減り、得意なことを生かし、そこに子ども達が集まって活動できるというのは一つの可能性として良いと感じた。

(委員)

・百瀬先生の発表は、美術部だけでなく他の色んな部に対しても同じことができるのではないかと感じた。私は科学の体験活動をしており、ある学校の先生に「私たちが毎回来なくても先生たちがやり方を覚えて広めてもらえればいいのでは」という話をしたことがあるが、「それは違う」と言われたことがある。その先生からは、「地域で育ったものを先生が持っている」と人事異動してしまうので、そこに根付かない」と言われた。地域にそういう好きな人を育てることで、地域の協力者が現れる。私も地域の人達を育てたいと思って活動してきて、協力者もかなり現れてきている。部活動改革の取り組みは「地域移行」ではなく、「地域で新しいものを育てる」ことだと思っている。なので、先生が関わってくれているうちに地域の人達を育てていただきたい。協力者を育て、それが広がっていくことが重要。

・バスで研修に行った研修に行ったことはすごく立派なことだと感じた。「今やっている勉強のもう一歩先を行きたい」ということで子ども達を外へ連れていったことは素晴らしい。また、自分達がお金を生み出して、それを費用に充てるという考え方も素晴らしいと思った。

・一緒に活動する中学生のボランティアの様子から、中学生は自分のやるべきことが分かっており、子どもでなく、大人に踏み出している。なので、竜峡中美術部のようなワークショップを通じて、

また次のことをやりたいという風にステップアップをしていく様子がすごく分かる。こういった取組が地域に根付くような方向性を持っていると嬉しいと感じた。

(塩澤座長)

・私たちが物事を考える時に、つい自分が中学生だった時を基準に考えがちだが、今の中学生・高校生は大人が思いもつかなかったようなすごいこともできる。楽しみでありながら、大人ぶって「あてもない」「こうでもない」と言っているのも少し違う気もしてきている。

(2) 今後の方向性について(賜部活動地域移行支援コーディネーター)

・先日、地域クラブの移行に向けた担当者会議で、長野県から「休日の学校部活動を令和8年度末を目途に地域クラブ活動に移行する」との方針が示された。国は令和7年度末としていたが、長野県は各地域の実情を踏まえ1年猶予を設けた。

・飯田市としては、令和7年度末には休日部活動の地域移行を進め、令和8年度に地域移行した形で動き出せるようにしたいと考えている。平日はできるところから移行を進める。

→補足・意見等なし

(3) グループ協議

【1グループ】

・百瀬先生の発表は素晴らしいと思う。特に「ゆるさ」「帰属意識」(を大切にしている点)。どこかでは繋がっていたという子は多い。自校以外の生徒も部活動として受け入れてやっていくとしたら、素晴らしいことだと思うが、現在の中学校の生徒の気持ちを考えると難しい面もあると思う。しかしながら、方向性とする間違いがない方向性だと思う。

・子どもが地域であてにされるというのが良い。この地域のためになんとかしようって思いが出てくる。いい部活(の取組)だと思うが、その部活をコーディネートするのは先生。それを地域でやろうとするとお金がかかる。ボランティアでは「とても無理」で絶対終わってしまう。

・実は土日に部活をやりたいくないという先生もいる。土日、例えば登録制になったとしたら、やらない先生もいるかもしれない。

・吹奏楽部は土日の活動を絶対やっている(やりたい先生が顧問をされているので)。美術部は、ほぼやらない。しかし、例えば月に1回とか、月に2回とか、目標立てて制作活動を行うということはありかもしれない。

・今までのような学校対抗の大会について、今は移行期で、学校も地域クラブも大会に参加できることで運用されているが、最終的には地域となると思う。そのところがはっきりしないのが、地域移行のネックのひとつとなっているような気がする。

・人件費がかからないように安くあげようと思ったらそれは無理。ただ、地域側も受入の課題として高齢化ということもある。

【2グループ】

・異年齢の中で活動することで生徒は成長していく。多様な人と活動できる場をつくっていくことを考えたい。

・吹奏楽や合唱部の大会がある限り、やはり結果を求められるし、生徒が結果を求めようとするのは当たり前である。その意識を変えることは、簡単ではない。学校単位での参加ではなくできるようになっていくとありがたい。合唱は、拠点校部活動からスタートさせたい。

・先生方のなかには、部活動をやりたい先生もいるが、やりたくても子育て等でできない人もいる。兼職兼業を無理なく進めていくことで、学校にある貴重な専門性をうまく活用したい。ただし無理

はさせない。地域の方で見てくださる方がいるとありがたい。

【3グループ】

- ・（飯田市美術博物館との連携について）竜峡中美術部のように市内の9校から依頼があったとしたら、年1回ぐらいなら受け入れることはできる。
- ・部活動アンケートの結果を見るに、部活動未加入の生徒が文化系の地域クラブに加入している割合は少ないため、メニュー（活動）を提示するだけでは参加につながらない可能性もあるのでは。
⇒子ども達はメニューを知らないだけなので、活動を知ればそれなりに参加してくれると思う。チラシだけを見て行く子はほとんどいない。参加して楽しかった子が友達を誘って広がっていくといったロコミの力が大きい。そのためには保護者の方にも理解してもらい勧めてもらうことが大切。
- ・吹奏楽部は土日も活動をしているため難しいかもしれないが、その他の文化部は土日であれば出られる気がする。ただ、文化部の生徒で習い事をやっている子も多い。
- ・地域移行を進める上で、吹奏楽のようなコンクールでの上位入賞を目指すものと、美術のようにレク的に取り組めるものと両方を一緒に考えていくのは難しい。
- ・時間外勤務が大変という声もあるが、年間20日登校日数を増やせば6時間目の授業分は賄える。毎日5時間授業すれば、部活動をやって4時半に帰れば平日の部活動は勤務時間内に収まるので、移行期間は登校日数を増やすことを考えてはどうか。

（4）アドバイザー 南信教育事務所飯田事務所 内田指導主事より

- ・本日は部活動の地域移行や地域連携を考える上で大切な話がたくさん出てきた。その中で一番の核になるのは、「子ども達がやりたいことを実現できるか」それを作っていくんだということが外れていなければ、百瀬先生がやっつけてられているような活動が地域との連携の中でも作っているのではないかと感じた。
- ・百瀬先生は中学校の先生なので子どものこともよく知っていて、対話の時間も取れる部活動だが、地域の指導者の方が、どのように子どもとの対話の時間を取ったり、子どもの「やりたい」を待ったりをできるかを考えていくことが、指導者の育成のところの課題ではないかと感じた。
- ・先生の転勤のお話もあったが、先生と地域の方が一緒に関わって活動していくことがあれば、先生とやってきたことを地域の方もよく知っていて、次の先生が顧問になったとしても持続していくようであれば、地域としてのより良い部活動のあり方になっていくのではないかと感じた。部活動の指導を続けたいと思っておられる先生が、いわゆる兼職兼業届を出して、部活動の指導を続けられる、しかも自分の地元の地域でできるという環境があると、みんながとても幸せになっていくのではないかと感じた。一緒に勉強させて頂きながらより良い環境を整えていけたら良い。